昭和十年七月復刻

元延祐
高麗刻本

六祖大師法寶壇經

解說　大屋德城

元延祐
高麗刻本

六祖大師法寶壇經に就いて

大屋德城

此に復刻する六祖大師法寶壇經は元の延祐三年丙辰（本邦正和五年）に高麗で開板したもので、今を距ること六百十九年前の本である。抑六祖壇經に異本があつたことは、古筠比丘德異の序に既に明記されて居るところで、德異は實に三十餘年遍く搜訪して、漸く善本を得たといつて居る。即ち序文の終に、

惜乎、壇經爲後人節畧太多、不見六祖大全之旨、德異幼年嘗見古本、自後遍求三十餘載、近得通上人尋到全文、遂刊吳中休休禪菴、與諸勝士同一受用。

と述べて居る。

然るに、明藏、又は明板、並に夫れ等を飜刻した和刻本には、南海の釋宗寶なるものゝ跋があり、文中、

余初入道有感於斯、續見三本不同、互有得失、

の一節があつて、斯經に三本あり、互に同じからずといつて居り。又諸處に一本又は他本なるものを引用して居る。然れば、元代既に異本が數種あつた譯である。因に德異の序には終に、至元二十七年庚寅とあり、宗寶の跋には至元辛卯とあるから、その翌年即ち至元二十八年に出來たものである。

即ち唐宋は暫く措き、元代に於いて、壇經に多くの異本があり、各長短異同があつたことは以上の文に依つても明かである。德異は吳中に完本を開板し、宗寶は南海に三本の異本があつたといふから、以てその消息の一斑を察すべきである。隨つて、今日種々の壇經が殘つて居るのは、それ等の一部分であらう。その邊の事は後日に讓り、此には專ら新出の壇經に就いて述ぶるであらう。

新出の壇經は昨秋余が東京に於いて獲るところで、一冊の刊本である。先づその外形からいへば、竪七寸八分、幅五寸一分、印面竪五寸五分、幅四寸三分、四周單邊、無界、黑口、半葉九行、行十七字、註雙行、板心には上に壇の一字を刻し、下に丁數を刻してあり、卷首の一葉の板心に、「胤禎刀」の三字が隱刻され、卷尾の一葉の板心に、「胤禎」の二字が隱刻されてある。こは彫工の名であつて、宋槧の形式を踏襲したものである。その刊行の年月に就いては、卷末に瑞光景瞻の跋があつて、秋谷長老の施財に依り、延祐丙辰の三月に開板した趣きが述べられてある。

さて、此に問題となるのは施財者の秋谷長老と瑞光景瞻の兩人であるが、種々の書物で調べてみたが、その傳記を詳にすることが出來なかつた。秋谷長老は報國秋谷長老とあるから、報國寺に住した人であらう。延祐は元仁宗の年號で、丙辰はその三年に當る。併し斯本は料紙から、體裁から元槧で無く、高麗の刻本と思はるゝから、延祐は當時元の正朔を奉じた高麗で用ひられたもので、高麗の末葉忠肅王の朝に當り、丙辰は即位三年に當る。高麗史を按ずるに、卷三十四、忠肅王紀に、

曹溪宗僧景麟景聰俱有寵於上王、出入禁闥、授大禪師。

とあり、即ち曹溪宗の景麟、景聰が王に尊ばれ、宮中に出入して、禪師號を賜つた記事であり、景瞻も夫れ等の禪僧

と同じく景字を冐して居るから、恐らく景麟、景聰の徒であらう。而して、甲寅元年の記事に依れば、高麗の使臣が寶鈔一百五十錠を以て、南京に於て、經籍一萬八百卷を購得したことがあり、又元の皇帝が忠肅王に、書籍四千三百七十一冊共計一萬七千卷を賜つたことがあり、皆宋の秘閣に藏するものであるといふ。されば、此の壇經の原本も元から渡來したものを、高麗に於て覆刻したものであらう。

斯書には二種の跋がある。その一は所南翁の跋で、その二は景瞻の跋である。所南翁の何人であるかは明かでない。先づ所南翁の跋を出さう。

壇經乃述六祖禪師本末與夫接門弟子問答之語、其辭直截豁露分明示人更無隱語、達磨而下最爲奇特、所謂直指人心見性成佛之捷徑、但其間別有一句、雖不出於文字語言之外、却不在於語言文字之中、試問諸人還讀得麼、若讀得出立地、化凡成聖、其或未然、且只循行數墨、亦福不唐損。

秋谷長老損財入梓流通、撒向諸人面前、直是老婆心切、不知誰解體悉此意耶、所南翁跋。

即ち六祖壇經を讀して、秋谷長老の施財開板の趣きを述べたものである。景瞻の跋も亦同趣意である。

法寶壇經乃是佛祖骨髓、直截根源了無枝葉、如日躍天磨所不照、如水歸海同一鹹味、見者、飲者莫不具足、報國秋谷老師刊板印施以廣其傳、欲令學般若菩薩頓悟心宗、令趣覺地、雖然葉落歸根、來時無口、若謂老盧末後句、此卷向甚處得來、延祐丙辰三月日。瑞光景瞻拜書。

次に斯本は跋文の示すが如く、延祐三年の開板には相違ないが、精査してみると、卷首に一葉を切斷した痕跡があり、卷末に印摺した時の墨が附着して居て、或はその次に今一葉の紙があつたのではないかと思はるゝ點があり、聊

か疑問の餘地がある。或は双方共に文字を印摺せぬ白紙が一葉宛あつたのを切斷したものかも知れぬ。又、斯本の中に白紙の小片に、如來行跡金沙論合部と墨書したものが挿んである點から考へると、或はあとに如來行跡金沙論といふものを、合刻してあつたのを、後に引離して、壇經だけにした爲に、最後の紙に印摺の墨痕が殘つて居るのではないかとも思ふ。紙數は六十八枚あり、內序文が二枚、跋文が一枚あるから、本文は六十五枚に爲る譯である。板式を更に詳しく調べると、中に數葉文字が肉太に爲つて、他の纖麗優雅なる書品に比し、頗る下るところがあり、或は補刻でないかと思はれる。附屬流通第十の中に作禮を作體に作るが如きは補刻の誤ではあるまいか。以上の數點に就いては、未だ釋然たらざるものあるを免れぬが、要するに、元の延祐年間に、高麗國で開板したことは明かで、唯その印摺の時代に就いて、幾分研究の餘地ありといふに歸する譯である。

次に斯本の內容に就いて述べよう。

斯本は卷首に、古筠比丘德異の序があり、次に經題があつて、門人法海集といふ略序があり、それから本文と爲り、終に師入塔の後開元十年壬戌八月三日に至り云々といふ守塔沙門令韜錄の一文と、宋大祖開國之初云々の一文があり、最後に前出の二跋があるのみで、明藏の壇經に比べると、大邊簡單である。即ち明藏本には、卷首に德異の序ある外、明教大師契嵩の六祖大師法寶壇經贊があり、本文の初に、風幡報恩光孝禪寺住持嗣祖比丘宗寶編とあり、卷末には附錄として門人法海等集の六祖大師緣記外記と題し、六祖壇經略序に相當する六祖の傳記と、歷朝崇奉事蹟と、柳宗元撰賜謚大鑒禪師碑と、劉禹錫撰大鑑禪師碑 并佛衣銘 を載せ、終に至元辛卯夏南海釋宗寶の跋を載せてある。此れ等の點に於いて、明藏本は斯の高麗刻本よりは大分增益せられた事が明瞭である。

次に篇章の排列に就いて、明藏と對照すると大分異るところがある。明藏本は行由第一、般若第二、疑問第三、定慧第四、坐禪第五、懺悔第六、機緣第七、頓漸第八、宣詔第九、付囑第十の順序と爲つて居るが、高麗本は悟法傳衣第一、釋功德淨土第二、定慧一體第三、敎授坐禪第四、傳香懺悔第五、參請機緣第六、南頓北漸第七、唐朝徵詔第八、法門對示第九、付囑流通第十の順序と爲つて居り。唯篇章の名稱が異るのみならず、その內容が必ずしも明藏に一致しない。詳にいへば、その篇章の分けかたが違ふのである。就中、明藏本の行由第一と般若第二を併せて高麗本の悟法傳衣第一と爲り、明藏本の付囑第十が高麗本の法門對示第九と付囑流通第十に分れて居るのである。之を表にして示せば左の通りである。。

明藏本高麗本對照表

(明藏本)	(高麗本)
行由第一	悟法傳衣第一
般若第二	
疑問第三	釋功德淨土第二
定慧第四	定慧一體第三
坐禪第五	敎授坐禪第四
懺悔第六	傳香懺悔第五
機緣第七	參請機緣第六

頓漸第八 ―― 南頓北漸第七
宣詔第九 ―― 唐朝徵詔第八
付囑第十 ―― 法門對示第九
付囑流通第十

次に兩本の內容を比較すると、大分文字の異同や出入があり、甚しいのは數節の轉倒があり、兩本が明に別系統の書たることを示して居る。さて、此に斷つて置かなければならぬ事は直に校異を書入れる明藏が手許になかつたので、終に

萬曆甲申秋八月節、舊恒照齋書。

といふ六祖壇經記を附した本を、寛永甲戌仲冬穀旦に、中野市右衞門の梓行するところの和刻本と對校することにした。斯本は序跋などの附屬の部分に於いては、明藏本と少々異る點もあるが、本文に於いては、明藏本と大略同一であるから、敢て差支ないものと思ふ。六祖壇經記は明藏本に缺けて居るから、左に之れを錄して置かう。

壇經法寶言下見性、善惡雙遣、本來清淨、悟入此門、最上乘人、寂土安邦惣在自心、九載秘旨三更頓傳、是破暗燈、是度海船、重法印施如珠、示與無價至寶、勿棄衣裡。

今兩本を對校するに、文句や章節の互に錯入轉倒して居るものが二個處ある。即ち明本（以下斯本を單に明本と稱する）定慧第四の中に一個處、明本坐禪第五の中に一個處ある。先づ定慧第四（高麗本の定慧一體第三）の中に、

師示衆云、善知識。我此法門以定慧爲本……不斷勝負、卻增我法、不離四相、

の次に左の一節がある。

善知識。定慧猶如何等、猶如燈光、有燈即光、無燈即暗、燈是光之體、光是燈之用、名雖有二、體本同一、此定慧法亦復如是。

而して、その次に、

師示衆云、善知識。一行三昧者、於一切處、行住坐臥、常行一直心是也。

として、此の一節は次の文字を以て終つて居る。

迷人不會、便執成顚、如此者衆、如是相教、故知大錯。

然るに、高麗本は

卻增我法、不離四相、

より「師示衆云」の四字を除き、直に、

善知識、一行三昧者、於一切處、行往坐臥、常行一直心是也。

に連續し、此の一節の終の

故知大錯、

迄を書し、飜て、

善知識、定慧猶如何等……此定慧法亦復如是。

と錯倒して居る。

次は明本坐禪第五(高麗本敎授坐禪第四)の中に、錯倒が一個處ある。明本では章の初に、

師示衆云、此門坐禪、元不著心、亦不著淨、亦不是不動、

とあつて、

若著心、著淨即障道也。

といふ一節があり、次に、

師示衆云、善知識。何名坐禪、

に始り、

善知識、於念々中、自見本性清淨、自修自行、自成佛道。

に終る一節がある。然るに、高麗本は全く此の兩節を轉倒して、文章を爲して居る。

以上の二個處が兩本の大に異るところであるが、文意を考へてみるに、前者の場合は明本の方が文意がよく通ずるやうであるが、後者の場合に於いては、明に高麗本が優れて居る。

次に兩本の對校に依つて得るところは、兩本に文字の異同があり、出入があることであり、今一々夫れ等を指摘することは、徒に煩雜に亘ることであり、全卷の校異を出さねばならぬ結果と爲る故、大體の上に於ける文字や辭句の異同を大略出してみよう。

明本の略序に於いて、明本は六祖の靈異を記すことが詳かであるに反し、高麗本は比較的に簡單である。文字も甚だ少い。

明本の行由第一（即ち高麗本の悟法傳衣第一）に於いて、主なる文字の異同は、

明本では、

爲衆開說(法)

とあるが、高麗本はその下に、

摩訶般若波羅蜜、

とあり。

僧尼道俗一千餘人、同時作禮、願聞法要、

の次に、明本は

大師告衆曰、善知識、菩提自性本來淸淨……

とあるが、高麗本は其の前に、

大師告曰、善知識、總淨心念摩訶般若波羅蜜、大師 良久 復告衆曰、

として明本と同じ文句に續けてある。明本には單に、

慧能一聞經語、

とあるところを、高麗本は次に、

應無所住而生其心、

の文句を挿入して居る。明本に、

一本有我亦要誦此結來生緣、

の一句を雙行にして、註と爲して居るが、高麗本は之を本文として居り、更に、

同生佛地、

の四字を加へて居る。明本は菩提本無樹の偈に、

惹或作有非、

といふ註を加へて居るが、高麗本は

此依黄梅山祖偈、正作惹字、或作有非。

と詳註して居る。明本に、

謂慧能曰、不識本心、學法無益、若識自本心、見自本性、

といふ句があるが、高麗本は全く此句を闕いで居る。明本に、

祖相送直至九江驛、祖令上船、

とあるところを、高麗本には、九江驛の下に左の六字がある。

邊有一隻船子、

明本の般若第二(高麗本では悟法傳衣第一の中)の初に、

次日、常使君請益、師陞座告大衆曰、惣淨心念摩訶般若波羅蜜多、復云、

とあるを、高麗本には極めて簡單に、

師復告衆曰、

に作つて居る。

明本の疑問第三（高麗本の釋功德淨土第二）は大した異同は無いが、左の如き小異がある。

（明本）	（高麗本）	（明本）	（高麗本）
一日	次日	度僧	供僧
度僧	供養	去邪心	無邪心
害毒忘	害毒除	唱言	唯言

明本の坐禪第五（高麗本の教授坐禪第四）の中に、

善知識、外離レ相即禪、內不レ亂即定、外禪內定是爲二禪定一、

とあり、次に、

菩薩戒經云、

とあるが、高麗本は此の兩句の間に、左の一句がある。

淨名經云、即時豁然、還得二本心一、

明本の機緣第七（高麗本の參請機緣第六）に、

師自二黃梅得一法、回至二韶州曹侯村一、人無二知者一、

の次に、「他本云」として、註を附してあるが、高麗本には全く此の註を闕いて居る。又、明本に、

有二魏魏一作レ晉武侯玄孫曹叔良一、

とあり、魏一に晉に作るとあるが、高麗本は正しく晉に作つて居る。明本の

行思禪師生吉州安城劉氏、

とあるを、高麗本には、

行思禪師姓劉氏、吉州安城人也、

に作り、明本に註して、

謚弘濟禪師、

とある註は高麗本には見えぬ。以下之れに同じ。

明本懷讓禪師の文中、

一本無西天以下二十七字、

と註が附してあるが、高麗本には所見が無い。明本玄覺禪師の條に、

溫州戴氏子、

とあるが、高麗本には此五字が無い。明本禪者智隍の條に、左の註があるが、高麗本には此の註は見えぬ。

一本無汝但以下三十五字、止云、師憫其遠來、遂垂開決、

明本に方辯の條下、左の註を附するが、高麗本には亦之れを闕いで居る。

一本無忽有以下七十六字、止云、有蜀僧方辯、謁師、々問云々、

又明本に、

曲盡其妙、

とあるを高麗本には、その下に、左の三字を添へて居る。

呈似師、

而して、此の一節最後の註を闕いで居る。

明本の頓漸第八（高麗本の南頓北漸第七）に、

生來坐不臥……

の偈に、

一具或作元是、

と附註するが、高麗本には此の註無し。明本に、

這沙彌爭合取次語、會乃問曰、和尚坐禪還見不見、師以柱杖打三下、

とあるを、高麗本には、

這沙彌爭合取次語、以柱杖打三下、會乃問曰、和尚坐禪還見不見、

に作つて居る。即ち句が錯倒して居る。明本に、

汝自性且不見、敢爾弄人、

とあるを、高麗本には、

汝自性且不見、敢爾戲論、

に作る。

明本の付囑第十（高麗本の法門對示第九）に、章名の下に、

空谷云、此下七百七十九字、是金天教人僞造邪言、刊板增入、

と註がしてあるが、高麗本には此の註が無い。

明本では同章であるが、高麗本の付囑流通第十に當る部分には大分異同がある。明本に、

師於太極元年壬子延和七月、是年五月改延和、八月玄宗即位、方改元先天、次年遂改開元、他本作先天者非

とあるを、高麗本には、

師於太極元年壬子七月、玄宗八月即位、方改先天元年、次年遂改爲開元、先天即無二年、他本作先天二年者非

又明本に、

師復曰、諸善知識、汝等各々淨心聽吾說法、

とあるを、高麗本には簡單に、

師復曰、汝等

に作つて居る。又、明本に、

大師先天二年癸丑歲八月初三日是年十二月改元開元、

とあるを、高麗本には、

大師開元元年癸丑歲八月三日、

に作り、明本に、

并道具永鎮寶林道場、

とあるを、高麗本には、

并道具等守塔僧者尸之、永鎮寶林道場、

に作つて居る。

以上大體に亘り、兩本の異同を擧げたが、一字二字の小さいものは列擧しなかつた。最後に高麗本には、守塔沙門令韜錄の次に左の一文がある。

宋大祖開國之初、王師平南海、劉氏殘兵作梗、師之塔廟鞠爲煨燼、而眞身守塔僧保護一無所損、尋有制興、修功未竟、會宋太宗即位、留心禪門、詔新師塔七層、加謚大鑑眞空禪師、太平興國之塔、宋仁宗天聖十年具安輿迎師眞身及衣鉢、入大內供養、加謚大鑑眞空普覺禪師、宋神宗加謚眞空普覺圓明禪師、本州復興梵刹、元獻公晏殊所作碑記具載。

六祖禪師自開元元年癸丑歲示寂、至至元二十七年庚寅、得五百七十八年矣。

以上、明本と高麗本との比較を終へたので、更に進んで、その他の諸本との異同に及んで一言しよう。

現在知られて居る範圍でいへば、唐宋時代の壇經に二本ある。一は即ち敦煌から出た本で、他は即ち京都の興聖寺に藏する本である。

敦煌本は英國のスタイン氏が持還つて、大英博物館に藏するもので、一紙を兩折し、一部二十六紙の寫本で、その

書寫の年代に就いては、何等の記載がない。併し書風から觀て、唐末或は五代の初の書寫に係るものと思はれる。隨つて、その撰述の時代も略推定される次第である。斯本は

六祖慧能大師於韶州大梵寺施法壇經

といふ名に爲つて居り、編者として、

兼受無相　戒弘法弟子法海集記

とあり。その體裁は篇章を分たず、內容は次に說く興聖寺本と類似し、その說述の順序も亦よく似て居るが、但篇末には大分差がある。而して、流布本（明藏本並に明本）とは大分異つて居る。興聖寺本並に明藏本との異同は松本博士の六祖壇經の書志學的研究（禪學研究第十七號、第十八號）に詳かであるから、此に之れを說かぬ。唯その一例として、有名なる神秀と慧能の偈を擧げよう。即ち神秀の偈は

心是菩提樹　身爲明鏡臺
明鏡本淸淨　何處染塵埃

とあり、慧能の偈は

菩提本無樹　明鏡亦無臺
佛姓常(マヽ)青淨　何處有塵埃

と爲つて居り、興聖寺本にある本來無一物の句が無い。

少しく餘論に亘るが、此に一言したい事は、壇經の原始的形式に就いてゞある。余の窃に考ふるところに依れば、

壇經は固より六祖の言行を錄したものであるが、初めから一定の形式があつた譯では無く、言行の幾個條かを唯雜然と書かれたものが、時代を經るに從つて整理され、唐の中期(か)に至り、達磨の法流を汲むものゝ中に、幾つかの門派を生ずるに及び、その對抗的意識が昂じて、謂はゆる南北兩宗を生じ、南宗を擧ぐる徒に依つて、北宗を貶し、南宗を褒むる意識が熾烈と爲つた結果、神秀、慧能兩祖の偈を作成し、謂はゆる南頓北漸の標語を生じたものと思惟する。而して、特に第六代の祖なる語を連發するところ又之れを傍證して居る。即ち當時天台には華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の五時の敎判があり、華嚴には小、始、終、頓、圓の五敎があり、華嚴の澄觀は禪を頓敎に攝するあり。斯る時代の傾向は禪徒自ら任ずるに頓を以てし、下級の禪を貶して漸とし、謂はゆる頓漸二宗を分つに至らしめたものであらう。宗密の禪源諸詮集には禪の十宗を出す中、北宗の目あり、圓覺經疏には七宗を擧げ、中に北宗の稱あり、拾遺門に五宗を列し、中に北宗、南宗の名あり、澄觀は玄宗の開元二十五年(本邦天平九年)に生れ、文宗の開成三年(承和五年)に寂し、壽一百二歲。宗密は德宗の建中元年(寶龜十一年)に生れ、武宗の會昌元年(承和八年)に寂し、享年六十一である。されば此頃が禪宗に流派を生じ、その對抗意識の燃上りたる時代と觀ても大過はなからう。即ち北宗の祖神秀門下の淨覺は開元の頃(か)楞伽師資記を著し、達磨楞伽を慧可に附する事實に立脚し、その心印を傳ふるもの唐朝に及んで八代、果を獲るもの二十四人を擧げ、その燈々相承を以て、禪宗正統の主張を爲せるものである。即ち楞伽傳燈の八代とは、譯經者の求那跋陀羅に起り、之れを達摩に傳へ、夫れより慧可、僧璨、道信、弘忍の六代を數へ、第七代に神秀、玄賾、安の三師、第八代に普寂、敬賢、義福、惠福の四師を列する。又開元二十四年に建てた大唐故大智禪師碑(長安碑林に在り)の序にも達摩より、可、璨、信、忍々經て神秀(大通禪師)より義福(即ち大智禪師)に至る七代を

擧げて、東山學門と稱した事を述べて、左の如く記して居る。

禪師法輪始自天竺達摩。大敎東派三百餘年、獨稱東山學門也、自可璨信忍至大通遞相印、屬大通之傳付者、河東普寂與禪師二人、即東山繼德七代于茲矣。

こはよく前出の師資記と一致し、唯求那跋陀羅を缺くのみである。此れ等に對して、弘忍門下の智侁無相無住を主とする一派があり、その師資幷に傳衣相承を記した歷代法寶記の出るあり、達摩の正統を持し、淨覺の師資記を破し、求那跋陀羅を斥けて居る。こは一面大智禪師碑とも相通ずるところがある。これらは當時論爭の片鱗を示すもので、その年代も大略澄觀、宗密の時代に當つて居る。されば、唐の中葉から、その末葉にかけて、斯る傾向が愈烈しくなつたものと解せらるゝ。

斯樣に觀察して來ると、此に看過すべからざる一書がある。そは日本天台の開祖傳敎大師最澄の請來に係る曹溪大師傳と稱するものである。斯書は

唐韶州曹溪寶林山國寧寺六祖惠能大師傳法宗旨幷高宗大帝　勅書
兼賜物改寺額及大師印可門人幷滅度時六種瑞相及智藥三藏
懸記等傳

といふ長い名の一卷で、請來錄(越州錄)にその目あり、現に延曆寺に藏し、寶曆十二年祖芳之れを上梓し、今に流行して居る。その體裁をいへば、卷子本で、竪八寸六分、全長十二尺一寸五分、烏絲欄を設け、一行二十六七字に寫してあり、奥に、

貞十九二月十三日畢

の記あり、即ち貞元十九年二月十三日寫了の意なるべく、貞元十九年は本邦延暦二十二年に當り、縫背に「澄封」の文字があり、最澄入唐して唐人鈔寫の斯本を獲て、請來した事實を語つて居る。（祖芳の書後に、貞元十九年を延暦二十年乙酉に當つるは誤である。剩へ二十年は辛巳で乙酉は二十四年である。）

斯書その長々しき書名の示すやうに、慧能の言說や行跡の幾條かを連記したもので、未だ著述といふ程の體裁を具へず、いはゞ覺書の類である。即ち慧能の傳法の宗旨、高宗の勅書、物を賜ひ、寺額を改めた事實、慧能の門人に關する事、慧能入滅の時の六種の瑞相、智藥三藏の懸記等を集めたもので、何人の手記であるか、いつ集めたものであるか明かでないが、假令記事中年代の錯誤少らずとはいへ、又西國二十八祖の語、曹溪山六祖の語ありとはいへ、南頓北漸の語も無く、神秀、慧能の偈を見ぬ點から考へると、相當古いものと觀ねばなるまい。その內容から考へて、後世の壇經は此れ等を粉本として、增廣潤色したものであることは容易に看取される。具體的にいへば、此れ等が資料と爲つて、敦煌本や興聖寺本の壇經と爲つたものであらう。

さて、元に回つて、壇經の異本中宋本の面影を傳ふる興聖寺本に及び、夫れと新出の高麗本の異同に及ばう。

興聖寺本は宋板の折帖を本邦で覆刻したもので、謂はゆる五山板の系統に屬するものである。體裁は折帖を方冊に仕立て上下二卷、拾五枚あり、上卷は七紙、下卷は八紙で、序文の二紙は後世の補寫に係り、下卷の第二葉（一紙）を缺いで居る。奥に興聖寺を開いた圓耳了然の墨書があり、慶長四年及び同八年に讀過した旨が記され、その書風と墨色から觀て、序文は圓耳の寫すところと考へられる。但此の序文が必然的に斯書の序文であるかどうかは研究を要す

るところで、無條件に受入れる譯にはいかぬ。併し今假に斯書と補寫の序文を不可分のものと考へて觀察すると、斯書は宋の紹興二十三年に開板したものである。

さて、此に聊か考へてみなければならぬ事は、此の序文なるものは初には惠泝述とあつて、終には晁子健謹記とあり、そして連記してあつて一文の體裁を爲し、どこからどこまでが惠泝の述であるか、晁子健の記であるか明かでない。恐らくは第一葉の裏一行目の

同見佛性者、

までが惠泝の序で、夫れに續く

子健被旨入蜀、

以下が子健の序であらう。前者に據れば壇經の古本は文繁くして、披覽の徒初は忻べども、後は厭ふに依り、丁卯の年兩卷十一門と爲したといふから、惠泝が古本を刪定して兩卷十一門と爲したといふ意である。即ち刪定者の序であり、後者に依れば、蜀から荆南に回り、七世の祖文元公手澤の寫本(壇經)を獲て、之れを開板した事が述べてあるから、開板者の序である。而して、文元公手澤の寫本と惠泝の刪定本との關係はどうなるか、惠泝の古本といふのが文元公の手澤本のことで、惠泝は夫を刪定したのか、或は反對に惠泝の刪定本を文元公が讀んだのか、之れは一に丁卯の解釋に係るが、惠泝の傳記が詳かでないから、その推定にも大分根據の薄弱を來す。鈴木博士(大拙)は後解を採つて、丁卯を宋太祖乾德五年又は仁宗天聖五年に擬して居られる興聖寺本六祖壇經解說が、最澄所傳の謂はゆる曹溪大師傳の書かれた貞元十九年からは、乾德五年は百六十五年に爲り、天聖五年は二百二十五年と爲る。即ち百五十年乃至二百年間に

壇經は非常に增廣して、「古本文繁」といふ狀態に爲つたと見ねばならぬ。而して、興聖寺本の開板された紹興二十三年本邦仁平三年までは、貞元十九年から三百五十一年であり、乾德五年からは百八十七年、天聖五年からは百二十七年である。併し翻つて考ふれば、惠洈の序には

分爲兩卷、凡十一門、

とあつて、興聖寺本の內容と一致するから、興聖寺本の序に相違ないが、而も晁子健の序には一言の惠洈に及ぶものはないから、此の序が果して興聖寺本の序であらうか。その邊にも一考を要するではあるまいか。若し果して然りとすれば、興聖寺本の原刊本を南宋紹興二十三年の開板に係るものといふことも亦一考を要するではないか。そこには尙殘された問題が潛んでは居まいか。

興聖寺本の原刊本を假に紹興二十三年の刊行と定め、高麗本の延祐丙辰三年と比較すると、此の間百六十四年であり貞元十九年からは五百十四年後と爲る。今興聖寺本と延祐高麗刻本とを比較すると左の如き結果と爲る。

興聖寺本は上下二卷十一門に分ち、高麗本は卷を分たず、章は十章と爲つて居る。而してその章名の兩者に於いて略一致するものが三ある。

興聖寺本は上卷に、一緣起說法門、二悟法傳衣門、三爲時衆說定慧門、四敎授坐禪門、五說傳香懺悔發願門、六說一體三身佛相門の六門があり、下卷に七說摩訶般若波羅蜜門、八問答功德及西方相狀門、九諸宗雜問門、十南北二宗見性門、十一敎示十僧傳法門の五門があり、合計十一門と爲つて居る。高麗本は前に出す通りであるが、その中、悟法傳衣第一は興聖寺本の二悟法傳衣門に、敎授坐禪第四は興聖寺本の四敎授坐禪門に、傳香懺悔第五は興聖寺本の五

說傳香懺悔發願門に、その名稱が酷似し、兩書の親緣の如何に密なるかを示して居る。

次に內容に入つて對照するに、前に擧げた明本と高麗本の章節の轉倒錯入の二個處が高麗本は全く興聖寺本と一致する。即ち第一の明本定慧第四の一條は高麗本と興聖寺本と一致し、興聖寺本と明本とは背馳する。第二の明本坐禪第五の中の一條も、高麗本と興聖寺本と一致し、明本と興聖寺本とは合はぬ。而して、此の章は右にいふ一節と他の一節の僅に二節より成るに過ぎぬが、興聖寺本には全く他の一節を闕いで居る。これ或は惠泝のいふが如く、文繁きに依つて削去つたものではあるまいか。

以上の對照に依つて明かなるが如く、高麗本は興聖寺本と非常な親緣を有し、形式は明藏本又は明本と類似しながら、その中に宋本と一脉相通する點が少くない。故に最小限度に於いて、高麗本は興聖寺本と明藏本との中間的のものであるといふ事が可能であらう。隨つて、壇經の形式を從來敦煌本——興聖寺本——明藏本と變遷したと考へられたが、今や、その間に高麗本を入れて、敦煌本——興聖寺本——高麗本——明藏本と改訂することが許されるであらうと思ふ。此の點に於いて、元延祐高麗刻本の出現は多大の意義がある。

余は復考へる。興聖寺本が比較的簡單であり、簡略であるといふ故を以て、之れが壇經の原形に近いものであり、原本であると考ふる事は聊か早計ではあるまいか。勿論興聖寺本は現在の形に於いては、敦煌本と共に壇經としては極めて簡單であり、簡略である。併し夫れは飽くまで現在の形に於いていはるべきであつて、最初からそうではなかつたのである。そは屢引く惠泝の序文に、

古本文繁、披覽之徒初忻後厭、余以太歲丁卯、月在蕤賓、二十三日辛亥、於思迎塔院、分爲兩卷、凡十一問。

とあるが如く、惠泝の獲た原本は今の興聖寺本よりは大分繁雜であり、廣本であつたのを、刪定して今の形と爲した事は明かであるから、興聖寺本の原本には必ずしも簡單でもなく、簡略でも無かつたであらう。前に擧げた明本坐禪第五、高麗本教授坐禪第四の中の坐禪に關する一節の如きは、元は右兩本の如く、今一節あつたのを惠泝が削除したのではあるまいか、斯樣に考へて來ると、興聖寺本に對する無條件的禮讃は少しく差控へねばなるまいと思ふ。畢竟するに、若し惠泝の刪定を經ざりしならんには、その繁簡高麗本乃至明藏と如何といふ問題は確に一考の餘地あるものと思惟する。斯くいふは決して余の妄斷でない。その證として擧ぐべきは、宋の佛日契嵩の鐔津文集（卷第十一）に收むる六祖法寶記叙である。法寶記は即ち壇經で、契嵩法寶記を編し、郎侍郎なるものその序を製す。されば、その序文を契嵩の文集に收めたものであらう。その叙の終の方に、侍郎は壇經が俗の增損するところと爲り、文字鄙俚繁雜殆ど考ふべからざるを厭ふた。然るに會沙門契嵩が壇經の贊を作つたので、侍郎は契嵩に壇經の校訂を勸めたところ、二年の後、契嵩は曹溪の古本を得て之れを校し、勒して三卷と爲したので、侍郎之れを開板したといつて居る。即ち左の通りである。

六祖之說余素敬之、患其爲俗所增損、而文字鄙俚繁雜殆不可考、會沙門契嵩作壇經贊、因謂嵩師曰、若能正之、吾爲出財模印、以廣其傳、更二載、嵩果得曹溪古本校之、勒成三卷、燦然皆六祖之言、不復謬妄、乃命工鏤板、以集其勝事、至和三年三月十九日序。

至和三年は宋仁宗の年號で、本邦の天喜四年に當り、天聖五年の後三十年に當る。即ち鈴木博士が興聖寺本惠泝刪定の年に擬せらるゝ（二說中の一說）年から三十年の後である。而して、興聖寺本開板の紹興二十三年から九十八年前

である。惜いかな、斯本は今に傳はらぬから、その内容や分量を明かにするを得ぬが、勒して三卷と爲たとあるから、相當の量があり、左程簡單なものであつたとは考へられぬ。果して然らば、惠泝の刪定した興聖寺本の原本（原刊本に非ず）も左程簡略であつたとは考へられぬ。斯樣に考へて來ると、興聖寺本と高麗本乃至明藏本との異同や關係も、更に再檢討を要しないであらうか。識者の一考を期待する。

高麗本の解說に就いては、これで盡したと思ふ。仍て此の邊で擱筆するであらう。終に斯の板本の復寫かと思はるゝものが宮內省圖書寮に在り、

咸豐十年庚申十月日普應拜書。

の識語を有することを附記して置かう。

（昭和十年六月京都に於いて）